

報告

吉蔵における「愛」

A Study of “Love” in Ji-cang’s Thoughts

高野淳一*

Junichi TAKANO

Keywords: Ji-cang, Love, Illusion

吉蔵, 愛, 煩悩

1.はじめに

「愛」は、仏教においては、「愛着」「愛執」といった熟語が有ることから考えられるように、衆生の持つ心の悪い働きの一つとして捉えられ、衆生が理想的な悟りを得るに当たり、克服しなければならない煩悩の一つだと理解される。その一方で、「愛語」という表現に見られるように、相手を慈しみ相手に合わせて教えるを述べるといった意味で使われることがあったし、「慈愛」という表現に代表されるように、他者を慈しみ安楽を与えてやるという意味で使われることもあった¹。こうした「愛」が、仏教が盛んになりつつあった中世の中国ではどのように捉えられ、理解されていたか。本稿では、中国仏教の諸宗派の勃興しつつあった時期、隋唐の際に活躍した吉蔵（549～623年）に焦点を当て、「愛」が吉蔵においてどのように捉えられ論じられていたかを窺い、当該時期の仏教のありようの一側面を明らかにしてみたい。

筆者は以前、吉蔵の煩悩観を所謂天台三大部との比較の下、論じてみたことがある²。本稿では、そうした以前の研究を念頭に置きながらも、特に「愛」に焦点を当てることにより、これまで見えてこなかった吉蔵思想の別の一面を確認できるのではないかと、特に本文中で述べるように、吉蔵には「愛」の否定的な面ばかりではなく、「愛」の肯定的な面についての言及も認められることから、これまでほとんど論及されてこなかった吉蔵の「愛」について、一定の理解を提示してみたいと思うのである。

2.吉蔵における「愛」の概念

まず、吉蔵が「愛」をどのように捉えていたか、基本的なところを確認しておこう。

問い。誰が一乗を信じる事が出来るのか。答え。六種類の人たちが、信心を生じる事が出来ない。第一に、愛を起こす衆生であり、深く世間の楽しみに執着し、仏の教える信じて受け取ることが出来ない。第二に、偏見を生じる連中、……第三に、二乗を求める人々、……第四に、『法華経』の教える「無常」の教えと信じ込んでいる連中、……第五に、この法華経では、密かに常住の教えるを説いていると信じ込んで

いる連中、……第六に、この法華経は明らかに常住の教えるを説いていると信じ込み、常住であることにとらわれている連中、……（問。何人能信一乗。答。有六種人、不能信。一者、起愛衆生、深著世樂、不能信受。二者、起見之流、自是非他、又不生信。三者、求二乘之人、執魚目為真珠、投夜光而按劍。故外国大小乘人、分河飲水、故説一乘、不生信受。四者、謂法華教猶は無常、聞説常住、不生信受。五者、謂於此經、覆相明常、聞説了説常、不生信受。六者、謂此經顯了明常、執成常見、聞説寂滅之道非常非無常、又不生信。……今若離上過失、心無所依、乃能信受也。）（『法華義疏』卷一・序品、大正蔵三四卷・四五四頁下）

「愛」を起こす衆生は、世俗世間の楽しみに深くとらわれ、信心を起こすことができない状態にある。

惑いと悟りの違いについて、四種類の人々がいて、次第をなしている。第一に、在家の愛を起こす衆生であり、生死の苦しみを厭うことを知らず、また苦しみを逃れるすべを持たない。第二に、出家した外道、……第三に、二乗の人々、……第四に、菩薩の人々、……（明迷悟不同、有四種人、以為次第。一者、在家起愛衆生、不知厭生死、亦不知出。二者、出家外道、知厭老病、迷於出路、而不知出處。三者、二乘之人、知厭知出、但是曲出、故於仏道、迂迴稽留、又住半路、不更進求。四者、菩薩之人、知厭知出、名為直出。故乘是寶車、直至道場。）（『法華義疏』卷六・譬喻品、大正蔵三四卷・五三四頁上）

在家の「愛」を起こす衆生は、生死の苦しみを厭い離れることを知らずにおり、それが衆生の惑いの根本になっていると見ることができる。

……凡夫は多く現象が「有」であることにとらわれ、二乗は現象が「空」であることにとらわれる。また愛の多い者は「有」であることにとらわれ、偏見の多い者は「空」であることにとらわれる。……（又如来常依二諦説法、以不達因縁有無二諦故、成性有無二病。二諦既無教不該、二諦之迷、亦無迷不

* 国際文化学科

撰。又小乗多著有病、学大者多滞無病。又凡夫著有、二乘滞空。又愛多者著有、見多者著空。是以斯論破此二也。）（『十二門論疏』僧叡序疏、大正藏四二卷・一七二頁中）

「愛」の多い凡夫は、現象が「有」であることにとらわれている。

……有と無とはもろもろの誤った見解の根本であり、あらゆる経論は、盛んにこの有と無との二つの見解を非難し退けている。凡夫が「有」であることにとらわれ、二乗が「無」であることにとらわれるようなもの。また愛の多い者は、現象が「有」であることにとらわれ、偏見の多い者は、現象が「無」であることにとらわれる。……（四者、以有無是諸見根、一切経論、盛呵二見、斥於有無。如凡夫著有、二乘著無。又愛多者著有、見多者著無。又四見多者著有、邪見多者執無。又仏法中、五百論師、執有闍畢竟空、如刀傷心。方広執無、不信因果。又為九十六種外道所執、不出有無。諸仏出世、復云有無是二理者、便増諸見心、何由可拔。故今明有無是教門、能通不二之理、不応住有無中、以欲息諸見故、経論明有無是教門。）（『大乘玄論』巻一・二諦義、大正藏四五卷・二二頁下～二三頁上）

かく現象についての「有」や「無」といった見解は根本的な煩惱で、「愛」の多い衆生は、現象が「有」であるという見解を離れることができないと言う。

このように見てくると、「愛」とは、在家の凡夫が起こす心の悪い働きであり、それは主要には、現象が「有」であるとする世俗世間でのとらわれを引き起こす働きをし、衆生の惑いの根本の一つとなっていると考えられているようである。

さてところで、こうした「愛」には、二つの力が有ると吉蔵は言う。

……愛には二つの力が有る。一つは、生死の苦しみを感ずる力、もう一つは、対境世界に感って正しい智慧をさえぎる力である。前者は、生死の険しい苦しみに入ることを明らかにし、つまり生死の苦しみをもたらすのである。後者は、対境世界に感って智慧をさえぎることを明らかにし、愛で心を覆うので、智慧をさえぎるという。（「以貪愛自蔽」者、上明由癡起愛、今明愛功用也。愛有二力。一感生死苦、二迷境障智。前明入生死嶮道、謂感生死苦。今明迷境障智、以愛覆心、所以障慧。）（『法華義疏』巻四・方便品、大正藏三四卷・五〇七頁下～五〇八頁上）

「愛」には二つの力が有る。一つは、生死の苦しみをもたらす力、もう一つは、認識の対象となる現象世界のありように感って正しい智慧をさえぎる力である。前者の力が、直接生死の苦しみにつながっていくのに対し、後者の力は、認識の対象で

ある現象世界に働きかける力に作用し、正しい智慧を晦ませてしまう働きをすると言うのである。

また、次に見るように、「愛」には煩惱を増長させる働きがあると有るという。

……無明には四つ有る。第一に、理に惑う無明。……第二に、業を發する無明。……第三に、業を覆う無明。……第四に、生存を潤す無明。『成実論』に拠れば、愛だけが生存を潤す働きを持ち、他のものはそれを助けるだけ、と言う。この解釈に拠れば、生存を潤すのはただ愛だけで、生存を受け取るのは広くさまざまな煩惱に通じている。……（言無明者、一顛通隠別、故說無明。過去世中、一切煩惱、皆有闇惑迷理之義。就此通義、故說無明。二者、無明煩惱、迷於本際、集起生死、其力最強、從強為名、故說無明。無明有四。一迷理無明。所謂迷於二諦之理。故地経云、不知世諦第一義諦、故名無明。二發業無明。所謂三根三毒煩惱。三根煩惱、能發思業、三毒煩惱、發身口業。三覆業無明。謂造業已、重於前境、起貪瞋等、復助前業、令其增長。四潤生無明。若依成実論、唯愛能潤、餘但遠助。若據斯義、潤生即狹、唯在於愛。受生則広、通於餘結。地経亦然。故彼経言、愛水為潤、無明覆弊、我心澀灌。毘曇云、潤生受生、諸結皆能、但纏垢等能潤、不能受生。）（『法華義疏』巻八・化城喻品、大正藏三四卷・五七二頁中～下）

すなわち、現実の生死の苦しみに満ちた生存を「愛」が助長するのであり、その点で「愛」は、衆生の生死の苦しみを潤す一つの「無明」に他ならないと位置づけることができる。そしてまた、

……煩惱というのは、愛が原因となって現実の煩惱が生じる。つまり愛の因縁により身心を悩ませるのである。あるいは自分を悩ませまた他人を悩ませるのである。だから、根本的な無知が愛の原因であり、煩惱は愛の果報である。（「癡愛故生悩」者、所以愛五欲者、由癡故起愛也。如涅槃云、誑故生貪。如浄名云、從癡有愛、則我病生。「悩」者、明從愛因生於現悩。所謂以愛因縁令身心悩。或自悩悩他故也。故癡是愛因、悩為愛果。）（『法華義疏』巻四・方便品、大正藏三四卷・五〇三頁上）

根本的な無知が「愛」を生み出し、その「愛」がまた煩惱を生み出すのだと述べる。

つまり、「愛」は、現実世界の生死の苦しみをもたらすと共に正しい智慧をさえぎる作用をするのだが、それ自体は無知から生じるものであり、さまざまな煩惱のもとになる、根本的な働きを持つものの一つと位置づけることができそうである。

さてそれでは、こうした「愛」に対処するにはどのようにしたら良いか。

空・無相・無作の三つは、二種類の三つの縁に対する。第一に、偏見の多い者に対しては空を説く。愛の多い者に対しては無作を説く。愛と偏見の等しい者に対しては無相を説く。第二に、真実を楽しむ人には空を説く。離れることを楽しむ人には無相を説く。善く寂かであることを楽しむ人には無作を説く。第三に、一人の根縁の結ばれのために空・無相・無作の三つを説く。……（然（空・無相・無作）三門為兩種三縁。一、見多説空、為愛多説無作、愛見相等説無相。二、為楽真人説空、楽遠離人説無相、楽善寂説無作。三者、為一根縁縛著説三。云云。問。一一皆究竟不。答。具二義。自有一一行皆究竟、如就空門、明有亦無、乃至無亦無。如是一切無所有、則不次餘門。二者、空門但破有、未破空無相、方破空相二門、雖破空有、未破能作觀行心也。故上二門已破境、今次破觀心也。）（『大品經義疏』卷四・幻學品、続藏一・三八・一一二、五二丁右下）

「愛」の多い衆生に対しては、「無作」、すなわち人為作為といったことさらな仕業の無いことで、その心の悪い働きに対処すると言う。同様に、

偏見の多い者に対しては空を説き、愛の多い者に対しては無作を説き、愛と偏見との等しい者に対しては無相を説く。外道が愛と偏見とを備えているので、無相を明らかにする。（又依智度論、見多者説空、愛多者説無作、愛見等者説無相。外道具足愛見、是故今明於無相。）（『百論疏』卷上之下、大正藏四二卷・二五九頁上）

偏見の多い者に対しては「空」を説き、「愛」の多い者に対しては「無作」を説き、偏見と「愛」の等しい者に対しては「無相」を説く。そしてそうした「空」「無作」「無相」の説き方はさまざまであり、

今四つの説き方を明らかにする。第一に、次第に病を破ること。有の病を破るために、空を説く。空と捉えるのを破るために、無相と説く。無相において、心を起こささまざまな仕業をするから、無作と説く。第二に、空によって有を破り、無相によって空を破る。これは空でも有でもない中道の法を明らかにしている。中道を観じるのを、正観と名づける。次に無作を説くのは、前の二つで空や有といった対象を無くすのだが、今次に観じる主体の心を無くすのである。……第三に、智度論で言う、実を好む者のために空を説く、空が最も実だからである。静寂を好む者のために無相を説く、涅槃が最も静寂だからである。離れることを好む者のために無作を説く、離れて求め為すことが無いからである。第四に、偏見の多い者に対しては空を説き、愛の多い者に対しては無作を説き、愛と偏見との等しい者に対しては無相を説く。（今略明四種。一明展転破病。為破有病、是以説空。破取空相、故説無相。於無相中、起心造作、故説無作。二又空門破有、無

相門破空、此明非空非有中道之法。觀中道者、名為正觀。次説無作者、前二雖泯空有之境、今次息於能觀之心。此三門明非空非有不縁不觀。明義既足、故但説於三。三又智度論云、為好実者説空、空最実故。為好寂靜者説無相、以涅槃最寂靜故。為好遠離者説無作、以遠離無所求作故。四又為見多者説空、愛多者説無作、愛見等者説無相。）（『百論疏』卷上之下、大正藏四二卷・二五九頁上～中）

特に「愛」に関わる「無作」について見ると、「無作」には、現象が「空」であることと「有」であることとの両方から離れ、とらわれなくなった上で、「空」や「有」を捉える心の働きそのものを無くし、理想的な中道を実現する作用をするのだと言う。現象を捉える心の働きにおいて、「空」から「無相」、更に「無作」へと、次第して認識が深まっていくことが想定されているようである。

ここまで、吉蔵の「愛」の基本的な捉え方を纏めておこう。

吉蔵は、「愛」を、在家の凡夫の引き起こす現象世界が「有」であることに対するとらわれだとする。「愛」を最も基本的な煩惱の一つと位置づけていると見ることができる。そこで「愛」には、生死の苦しみをもたらす力と、現象世界に惑って正しい智慧をささげざる力とが有ると述べる。そのように直接苦しみをもたらすだけでなく、正しい智慧をささげざる本となる「愛」は、かくてさまざまな煩惱を引き起こす本になる「無明」の一種とも考えられる。そして、そうした「愛」に対しては、「無作」すなわちことさらな人為作為の無いことによって対処するのである。そのことを通し、現象の「有」にも「空」にもとらわれず、またとらわれない心の働きをも超越した中道が実現できると言う。

3. 吉蔵における「愛」の諸相

前節で、吉蔵の「愛」の捉え方の基本的なところを見たが、ここで節を改め、吉蔵の「愛」についてのいくつかの見解を確認しよう。

「愛」は十二因縁の一つの中に組み込まれる、衆生の苦しみの連鎖の構成要素の一つなのだが、そうした十二因縁の中の「愛」についての吉蔵の見解はどうか。

今最初に因果の中道を明らかにして、生死の苦しみの根本を窮めようとする。生死の苦しみは、無明と愛とを出ない。この二つがあるから、生死の苦しみが有る。だからこの二つを生死の根本とする。今この生死の根本を窮めてこの二つを明らかにしようとするならば、無明は現在の生死の根本で、愛は未来の生死の根本である。この二つの中間に生老病死が有ると言うのは、無明の中間に現在の生老死が有り、愛の中間に未来の生老死が有る。だからこの二つの中間に生老死が有ると言う。中道と名づけるというのは、過去の前の二つの原因が滅するから常住でなく、現在の五つの果報が続いているから断滅でなく、常住でも断滅でもないから、中道である。

また現在の三つの原因が減するから常住でなく、未来の二つの果報が続いているから断滅でなく、常住でも断滅でもないから、中道と名づける。(今初明因果中道、此即窮於生死之本。生死不出無明與愛。有此二種故、即有生死。故二種為生死本。今欲窮此生死之本、欲明此二種、無明即是現在生死之本、愛即是未來生死之本。言是二中間有生老病死者、無明中間有現在生老死、愛中間有未來生老死。故云、二中間有生老死。言是名中道者、過去前二因滅故不常、現在五果統故不斷、不常不斷、故即是中道。亦是現在三因滅故不常、未來二果統故不斷、不常不斷、即名為中道。)『中論疏記』卷三本所引『涅槃經疏』師子吼菩薩品、大正藏六五卷・七五頁中〜下)

河西大師の解釈は、経にかなっている。その言によれば、愚かさや愛とは本来虚妄であり、愚かさや愛など無い。既に愚かさや愛が無いとすると、すなわち生死の苦しみなど無いのだ。このようにさっぱりと悟るのを、中道と言ひ、これを仏性と名づける。(若是河西釈意、容與經会。彼云、癡愛本虚妄、則無癡愛、既無癡愛、即無生死。如是豁然大悟、此中道之法、即名為仏性。)『三論玄疏文義要』卷六所引『涅槃經疏』師子吼菩薩品、大正藏七〇卷・三〇一頁中)

「愛」は、未来の生死のもとであり、現在の三つの原因(愛・取・有)が減するから常住でなく、未来の二つの果報(生・老死)が続くから断滅でなく、かく常住でも断滅でもないから、中道と言えらるのだと吉蔵は主張する。更に河西道朗の解釈を引用し、本来愚かさや「愛」など無いと悟るのが理想的な中道であり、かくてそれが「仏性」と名づけられるのだとする。十二因縁を考える中で、さまざまな原因や果報が常住でも断滅でもなくそこで中道と捉えられるのであり、そうした中道を悟りの大本としての「仏性」と捉える吉蔵の立場を、ここで確認することができる。

「愛」は、このように、十二因縁の一つに数えられる、衆生に生死の苦しみをもたらす悪い要素の一つである。そのため、こうした「愛」の関わっている行為は、それがたとい基本的には良い行為であっても、退けられる場合がある。以下に確認しよう。

……もしも以上のように、自分の病と衆生の病とを、真実でなく有るのでないと捉え、大悲を起こす者は、正しく間違いが無い。そうした捉え方が純粹でなく、衆生を愛して大悲を起こす者を、愛見の大悲と名づける。見は偏見という煩惱、愛は愛という煩惱のこと。愛や偏見が混じっているので、捨て去るのが良い。(「作是觀時、於諸衆生、若起愛見大悲、即應捨離。」此第二明化他得失。若能如上、了自病及衆生病、非真非有、而起悲者、則唯得不失。但此觀未純、見衆生愛之而起悲者、名愛見大悲。見即見使、愛謂愛使。此雖悲心、雜

以愛見。故宜應捨之也。)『維摩經義疏』卷四・文殊師利問疾品、大正藏三八卷・九五九頁下)

「愛」の混じった大悲の行い、すなわち他人の病を見、それを救いたいと思う気持ちを起こすのは良い行いなのだが、病が固定的に有ると捉え、かくて他人を愛する気持ちを持って救おうとする場合、それは「愛見の大悲」として退けられなければならないと言う。「大悲」じたいは菩薩の優れた行いだと言えるのだが、そこにいったん「愛」が介在してしまうと、その行為は、やはりとらわれた中道に外れた行いだと言うのであろう。

こうした「愛見の大悲」に見られるように、「愛」の介在する仕業は、煩惱にまつわりつかれた悪い仕業だとされるわけだが、その一方で、吉蔵には、次に見るような、肯定的な「愛」の用例も確認できるのである。

この中に四つの方便が有る。ここで三つの方向から解釈してみよう。第一に、まだ善法に入っていない衆生を、善に入れさせる。善法に入っているとはいえ、疑いの無いわけにはいかないで、疑いを断ち切つてやる。疑いを断ち切つても、まだ優れた智慧の境涯に至っていないので、優れた智慧を得させる。優れた智慧に至っていないで、まだ解脱を得ていないので、解脱を得させる。第二に、勝鬘經の四つの重い荷物のこと。何を四つとするか。一つには、仏の教えを聞くことが無く教えを誘う衆生に対し、人天の教えを説いて、善法に参入させる。二には、声聞の教えを説いて、四諦の中の疑いを断ち切らせるから、もろもろの疑いを断ち切ると言う。三には、縁覺の教えを説いて、優れた智慧に参入させる。縁覺の智慧は声聞の智慧より勝っているからである。四には、方便をもって大乘の教えを説く。大乘の教えの中で、四つの摂法によって収める。布施で収めて、己の仲間とする。愛語で説いて、菩提心を起こさせる。利他行で収めて、良い素質を増長させる。同事で収めて、成仏させる。第三に、仏性論に拠れば、四人のために四つの差し障りを破り、四つの原因を成就して四つの果報を得る。……(此中明四種方便。今以三義釈之。一者、未入善法衆生、令其入善。雖入善法、未得無疑、故為斷疑。雖復斷疑、未入勝智、令得勝智。雖入勝智、未得解脫、故令得解脫。二者、即是勝鬘四種重擔。云何為四。初為無聞非法衆生、說人天乘、令入善法。第二、說聲聞乘、斷四諦中疑、故言斷諸疑故。第三、說緣覺乘、令入勝智。以緣覺智勝聲聞智故。第四、方便為說大乘。於大乘中、以四攝法攝之。以布施攝之、令為己眷屬。以愛語說之、令發菩提心。以利行攝之、令善根增長。以同事攝之、令其成仏。三者、依仏性論、為四人破四障、成四因得四果。故不多不少、但明四種。初方便、破聞提不信障、令信樂大乘、為成大淨種。第二方便、破外道邪我相障、令得波若、為大我種子。而言斷諸疑者、無有虚妄之我、有仏性之我、於有無法中、諸疑得斷。第三方便、破聲聞怖畏生死障、令得破虚空三昧、成就為大乘種子。種子以勝前二種方便、故云勝智。又初一為下、次一為中、

後一為上、故云増上。第四、破独覺自愛身障、令得大慈大悲、成就為大常種子。以緣覺無悲故、今明四摂法、即是大悲。）（『法華論疏』巻中、大正蔵四〇巻・八〇四頁中～下）

ここでは、大乘の方便として、四つの摂法を取り上げ、その中の一つとして、「愛語」の働きを述べる。すなわち「愛語」とは、相手に合わせた愛情を持った言葉で説くことにより、仏道に向かつていこうとする菩提心を起こさせるのだと言う。この「愛語」というのは、四摂法に関わって提示されたものだが、これまで見てきた悪い働きをする「愛」とは異なり、相手に対する思いやり、愛情を持った説き方を指し、「愛」の肯定的な面を示す使い方になっていると見ることができる。吉蔵は、大乘菩薩の方便のありかたに関わり、四摂法を方便の中に組み入れる形で、菩薩が他人を仏道に引き込もうとする一つの方法として、「愛語」を捉えている。こうした「愛語」の「愛」の使いかたは、これまで見てきた否定的な一面とは異なる、「愛」のまた別の、肯定的な一面を示している例と捉えられよう。

以上、「愛」についての吉蔵のさまざまな見解をまとめよう。吉蔵は、十二因縁の中の一つに位置づけられる「愛」について、それが未来の生死の苦しみをもたらす本であり、生死の苦しみをもたらす因果関係の中で、常住でも断滅でもない中道を悟るべきだとし、本来そうした「愛」が無いと認識することが理想的な中道であり「仏性」であるとする。また、そうした「愛」の混じった「大悲」の行いを、「愛見の大悲」として退ける。前節で確認したように、「愛」は、衆生に悪い煩惱をもたらす根本的な原因の一つであり、その限りにおいて、除き去るべき悪い心の働きと捉えられていたことを、ここで再び確認できる。

だがその一方で、菩薩が他人を仏道に引き入れようとする四つの摂法の一つとしての「愛語」に注目し、それを大乘菩薩の方便の働きの一つに関連づけて肯定的に評価している。吉蔵における「愛」の肯定的なまた別の一面と見なすことができよう。

4.おわりに

本稿では、「愛」ということに着目し、吉蔵における「愛」の基本的な捉えかたを確認した後で、吉蔵におけるさまざまな「愛」の理解を分析した。「愛」は、基本的には煩惱の根本の一つと考えられる心の悪い働きに他ならないわけだが、吉蔵は、特に「愛語」という四つの摂法の一つを大乘菩薩の方便の働きに位置づけている点で、「愛」の肯定的な一面に対する目配りを欠かしていない。その点に、吉蔵独自の立場を確認できるように思うのであるが、吉蔵の「愛」の特徴を明らかに指摘するためには、他の仏教者の思想における「愛」の捉え方の分析が不可欠となつてこよう。それについては、また稿を改めて考えてみたい。

「愛」をめぐる問題を考える時、仏教だけでなく、中国固有の伝統思想との関わりについても、慎重に検討する必要がある。例えば、仏教を受け入れる下地になったと評価される魏晋期の固有思想、王弼（226～249年）の『老子注』では、理想的な「道」を踏まえていない場合の「愛」の偏ったありかたが問

題とされ³、郭象（252～312年）の『莊子注』では、万物それぞれの持ち前にそむいた「愛」のありかたが問題とされるようである⁴。いずれにしても『老子』『莊子』の中で、「愛」がどのように取り扱われているかを十分に検討する必要がある。そして固有思想の中でも、儒教で言われる「仁愛」との関連性も気になるところではあるのだが、それら諸問題についても、やはり今後の課題としておきたい。

注

1 仏教における「愛」をテーマとした研究としては、仏教思想研究会編『仏教思想1 愛』（平楽寺書店、1975年）所載の諸論文を参照。特に、多数の大乘仏典がもたらされ、菩薩仏教の成立した南北朝時代から隋・唐期に至っては、仏教の「五戒」と儒教の「五常」が同一視され、その中で、仏教の「慈悲」と儒教の「仁愛」との同一性が問題とされることがあったという、木村清孝「儒教における愛の対比と交渉」が示唆に富む。

2 高野淳一「煩惱を如何に捉えるか—吉蔵と天台三大部の煩惱観・智慧観—」（『集刊東洋学』第93号、2005年）で、「煩惱」をめぐる吉蔵といわゆる天台三大部の見解を比較検討している。

3 『老子』38章王弼注に「本在無為、母在無名。棄本捨母、而適其子、功雖大焉、必有不濟、名雖美焉、偽亦必生。不能不為而生、不興而治、則乃為之、故有宏普博施仁愛之者。而愛之無所偏私、故上仁為之而無以為也。愛不能兼、則有抑亢正直而義理之者。……」とあるのを参照。

4 例えば、『莊子』「天運篇」郭象注に「夫人之一体、非有親也。而首自在上、足自處下、府藏居内、皮毛在外、外内上下、尊卑貴賤、於其体中各任其極、而未有親愛於其間也。然至仁足矣、故五親六族、賢愚遠近、不失分於天下者、理自然也、又奚取於有親哉。」とあるのを参照。